さざなみ国語教室
第502号　2024年1月25日
発行者代表　吉永幸司
連絡先　大津市柳川2-11-5
℡ 077-522-1008
発行所　滋賀児童文化協会
NPO 現代の教育問題研究所

教材開発の楽しさ

月岡　正明

社会科を研究している教員にとっての楽しさや醍醐味の一つに「教材開発」がある。教材とは、資料や実物から単元を通して学ぶ学習対象レベルのものまで様々なものがある。社会科は他教科と比べて、授業者が見付けたり開発したりした教材を授業の中で活用できる部分が多く、教材を工夫する余地が多いと感じている。

私は初任六年目で初めて社会科の研究授業を行ったが、内容は、六年生の歴史単元の「民衆運動の高まり」だった。第一次大戦後、豊かな暮らしと民主主義の実現を求めて多くの人たちが立ち上がったことについて、どんな内容を取り上げれば子供が興味関心をもってくれるのか悩んでいた。学校の図書室で、当時の富山県魚津市の主婦たちが、米の買い占めによる値上げに反発して夜中に米倉を襲って米を運び出している米騒動の風刺画を見付けたとき、頭に閃くものがあった。この米騒動の風刺画とそれに関連する内容を自分なりに工夫して組み合わせた教材を作成し授業で使用した。授業では、子供たちがとてもよい反応を示し、当時、国民の願いがどのように実現にされたのかに興味関心をもって追究意欲を高めてくれた。

それ以来、道を歩いていても、テレビや新聞、雑誌を見ていても何か面白そうなものを見付けると、これは授業で使えないかと考えるようになった。学校を異動した際に、新しい学区域で出会った様々な施設や人材を積極的に取材したり調べたりして教材化し実践した。本当に多くの教材を開発し、そのたびに様々な発見や感動があった。子供たちも身近な地域の教材を通して、実際に見学調査したり話を聞いたりして具体的な学習ができたり、意外性のある教材と出会ったりして意欲的に学習に取り組めたと感じている。

教材開発を行うために、「巡検」と称して実際に現地に行き、実際の様子を写真や動画に収めたり、専門家や実際に関わっている方から聞き取りを行ったりする。その際にも、どうすれば子供が興味関心を示すか考えて写真や動画の撮り方を工夫する。取材する際は、その学習のねらいを考えたり子供の学ぶ姿を思い浮かべたりしてどんどん質問をし、内容を掘り下げていくのようにしている。

教材開発を通して社会科の楽しさや面白さを実感するとともに、様々な発見や感動が自分の人生も豊かにしてくれたと思っている。

（青山学院大学　教育人間科学部特任教授）

さざなみ

▼40歳になる卒業生が20歳になる卒業生に成人式のお祝いを企画する「藤の子同窓会」（京都女子大学附属小学校）に参加しました。プログラムの中に20歳になった抱負や小学校時代の思い出を語るという時間がありました▼参加した青年たちの小学校時代は、教育目標を「国語力は人間力」を合言葉にしていました。小学校時代の思い出が中学校・高等学校時代に「国語力」「人間力」が力になっていたという内容のスピーチが共感を得たひとときでした。▼その頃の教育目標が意図したことは、国語力とは、自分の考えや気持ちを言葉で表現したり、他者の言葉を理解したりする力であるということ。それは、人と人とのコミュニケーションや社会で生きるための基本的な力であり、人間力と言っても過言ではないという信念から生まれたものです▼「音読集会」では、詩や古典を声に出して読み、言葉の美しさや深さに触れたこと。「ノート検定」では、ていねいに書く習慣が身につき書くことが好きになったこと。「言語力検定」では、四字熟語やことわざなど、言語の知識を増やし理系学生として役立っていること等、青年たちから伝わる「人間力」の思いを深くしました▼「20歳の青年たちが40歳になった時の藤の子同窓会の話題は何になっているのだろう」と考えたひとときでした。（吉永幸司）

さざなみ国語教室のホームページ　http://www.eonet.ne.jp/~sazanamikokugo
NPO 法人 現代の教育問題研究所のホームページ　http://kokugo-npo.com/index.html　ご覧ください。

言葉の蓄積

川端　由起

今年も11月に草津市ではビブリオバトル大会が行われました。ビブリオバトルは、滋賀県下でも、草津市が特に力を入れてやっています。元々、立命館大学の教授の先生が提案してくださり、草津市全体で広まりました。ビブリオバトルは小学校、中学校、一般の参加者がそれぞれグループに分かれて自分のおすすめ本を紹介し、一番読みたくなった本のチャンプ本を決めるものです。本校は昨年、今年と参加させていただいていますが、今年はビブリオバトルの英語部門が新設され、本校からは２名の出場者を出すことができました。（小学校の参加者は本校の児童のみ）

ビブリオバトルの結果を受けて感じたことは、皆さん本当によく本を読んでいるなという感想をもちました。３年生で「かいけつゾロリ」４年生で「銭天堂」という子どもたちに人気の本でビブリオバトルが行われるのではなく、夏の読書感想文の課題図書や、本屋大賞に選ばれる本でのビブリオバトルが繰り広げられたのです。また、その難しい本の感想を丁寧な言葉に置き換え、表現豊かに説明できる子どもたちが大勢いることに大変驚きました。

自身の学校に戻った時、学級はもとより学校全体のレベルを上げるためにはどうしたらいいか考えました。昨年度は、２年生から６年生まで、各クラスでビブリオバトルを行って、学年でビブリオバトルを開催し、学年の代表を選んでいました。しかし、今年は様々な要因が重なり学年毎のビブリオバトルが実施出来ず、希望者のみを草津市のビブリオバトルの大会に本校の代表として出場してもらいました。希望者のみはやはり特定の児童、つまり、本が好きな児童しか希望者が集まらず、図書員ばかりが希望者となっていました。４月から単元を貫く言語活動の展開を実施することで、書く作業に徐々に慣れていくことを行い、朝学習で言葉を増やす学習を行っていくことが言語力、国語力の向上に繋がっていくのではないかと最近考えます。

教科書の内容を理解できても、書く時に豊かな言葉を使って表現できる児童は中々いません。豊かな言葉を使って表現できるには、言葉の蓄積が必要です。最近低学年でも国語辞書を使えたらいいのにと思います。国語辞典の使い方は３年生から学習しますが、タブレットを利用して、どんな学年であっても、言葉の積み重ね、たから箱を作っていきたいです。

（草津市立志津小学校）

『いざ、実践！パート②』

井上　滉斗

昨年度の十一月の近江の国語実践研究会では、高木先生の実践発表を聞き、「シンキングツール」の実践に感銘を受けた。今までの自分の指導では、シンキングツールをほとんどつかったことがなかったので、高木先生の実践を聞いていると、国語×シンキングツールの親和性にとても魅力を感じた。

これはすぐに実践するしかないと思い立ち、『プラタナスの木』の学習で活用した。

〈初発の感想でイメージマップ〉

今まで、初発の感想を書かせる際は『感じたこと』『疑問』などの観点を伝えた上で、文にして書かせていたが、

△文にするのが苦手な児童がいる

△友だちの考えと比較がしづらいという難点もあった。

今回「イメージマップ」から初発の感想を書いたことで、

◎短い言葉で表現できるので、すべての児童が主体的に取り組めた

→イメージマップで用いた言葉を、自分の考えをまとめた文章を再構成できた。

◎視覚的に友だちとの考えが比較でき、さらに学びが広がる。

→子ども同士の対話が生まれた。

という二つの良さを感じた。

〈読後感をレーダーチャートに〉

『プラタナスの木』の学習の目標を「読後感をもとに、自分が決めた物語をしょうかいしよう」に設定した。読後感を表すために、「レーダーチャート」を活用した。

まず、『プラタナスの木』の自分なりの読後感をレーダーチャートまとめ、そのように表現した理由を文章に表した。自分と友だちとの読後感の強さや理由の違いを楽しみ、さらに物語へ引き込まれている様子があった。

次に、自分が紹介したい物語で同じようにレーダーチャートを活用しながら紹介文をつくった。自分が抱いた読後感をもとに、紹介文を書き「この物語を読んだら、こんな気持ちになるんだよ」と主体的に交流する姿があった。

このように、シンキングツールを活用したことで、子どもたちの主体的・対話的で深い学びにつながったように思う。自分の考えを整理したり、友だちの考えと比較したりするときの一助となった。

一方で、イメージマップはあくまで思考を整理するための道具である。そのため、イメージマップを完成して終わるのではなく、その後の言語活動につなげていくことを忘れてはならないと感じた。

（豊郷町立日栄小学校）

『お手紙』　音読が変わる
授業を目指して

川部　長人

現在、小学二年生の担任をしている。今年の国語科では、音読と視写に力を入れて指導を行っている。国語の学習では、まず文章がしっかり読むことができ、文章をしっかり書くことができて、自分の考えが持てると考えてるからである。今回『お手紙』の学習では、音読に力を入れて取り組んだ。授業の初めに音読をし、内容を学習した後で音読が変わるような授業を行いたいと思ったからである。今回は三時間目に「各場面の登場人物の行動や様子に着目して、物語全体の流れを捉える」学習を行った。その授業場面と、授業後の音読の変化について述べる。

Ｔ　第四場面のがまくんやかえるくんはどんな様子かな？
Ｃ　お手紙を届くのを待つようになった
Ｃ　一緒に幸せな気持ちで玄関の前で待っていた
Ｃ　この時のがまくんの気持ちは、うれしいメーターで言うと百パーセントくらい
Ｃ　かえるくんも幸せな気持ち
Ｔ　なんでかえるくんもうれしい気持ちなの？　お手紙をもらえるのはがまくんだけじゃないの？
Ｃ　自分の書いたお手紙でがまくんが喜んでくれたから
Ｃ　お手紙を書いてよかったなと思っていると思う
Ｃ　今、思いついたのでもいい？　人をうれしい気持ちにしてうれしい
Ｃ　あぁ～。人が喜んでくれると自分もうれしいから。
Ｃ　二人のうれしい気持ちメーターは百を超えて二百くらい
Ｃ　いや、もっと上。千くらい
Ｃ　いや、無限
Ｔ　二人ともうれしさメーターでいうとどれくらいやろ？　百超えて二百くらい？　千くらい？　無限大くらい？（挙手多数）　そうか。この時の二人はうれしさ無限大なんやね。そういったがまくんやかえるくんの気持ちがわかるように音読していきたいね。

この学習の後、もう一度音読をした。子どもたちは今まで何となく音読していたのが、一・二場面では、がまくんやかえるくんの悲しい気持ちが伝わるように、四場面以降では二人のうれしい気持ちを音読によって表現していった。初任者のころなどは音読についてほとんど指導せずに、何となく音読させたり、宿題で出すだけになったりしていた。音読は子どもたちに読みの力をつけていく上でとても大切なことなので、今後も深めていきたい。

（東近江市立能登川南小学校）

思いのこもった言葉

畑中　翔太

冬休みが終わり、久しぶりに子どもたちに出会いました。
「おはようございます。」
と笑顔で私のそばに寄ってくる子ども達を見て、その元気な姿に安心し嬉しさを感じていました。

そんな中、Ｃさんの様子が気になりました。Ｃさんはランリュックを背負ったまま朝の準備をすることもなく不貞腐れたように座っているのです。人とのコミュニケーションや気持ち面で支援を要する子ですが、いつもと様子が違うことは明らかでした。何かあったのか問うと、いつもは仲の良いＤさんと登校中に喧嘩をしてしまったそうでした。

その日はちょうどＣさんに日直の仕事が当たっている日でした。日直は朝の会で「好きな食べ物」というテーマでお話をすることになっています。Ｃさんはこう言いました。
「ぼくのすきなたべものは、みかんです。どうしてかというと、えーと、あまいからです。」
どこかたどたどしい言い方に、他の子たちもＣさんの様子が気になったようでした。するとＤさんが「みかんが好きなの、ぼくと一緒や。」と言いました。そこで私は、Ｃさんが Ｄさんの好きな食べ物を知っていて、照れながらも発表したことに気が付きました。コミュニケーションをとることに難しさがあるＣさんなりの歩み寄る姿がありました。

しかしＤさんはその歩み寄りに気づいていない様子でした。私は「Ｄさんと同じみかんが好きなのですね。いいですね。」とＣさんの思いをＤさんに繋げようとして言いました。それを聞いてＤさんは笑顔になったので私はＣさんの言葉を生かすことができたと感じました。

今後もお話タイムや発表の機会に、思いを込めて発言する子がいるかもしれません。子どもたちが、そのように生もののような言葉のやり取りをすることが、言語活動として意味のある時間だと思います。

なぜならＣさんは自分から話し、Ｄさんは自分からその言葉に関わっていたからです。また他の子たちもその様子を敏感に感じ取り、進んで聞こうとしていました。改めて子ども達が思いをいきいきと表現できる場を整えることの大切さ再確認させられました。

（大津市立田上小学校）

ことばの学習

北島　雅晴

ことばに関心をもち、ことばの世界を広げていくことが、国語学習の基盤として重要になる。そのために、次の二点が大切だと考える。

〇ことばについて、楽しみながら学ぶこと。

〇生活と結びつけてとらえること。

二学期に学習した二年生の学習を紹介する。（以下、Ｃは子どもの発言、Ｔは教師の発問を表す。）

その１．漢字音読

現在使用している「かんじドリル」に、「かん字とあそび歌」という欄がある。二学期に出てくる漢字の一覧表である。国語の学習のはじめに、音読することにした。

朝顔毎家当間昼
半電外声楽親父
七文字ずつ読んでいく。
「ちょう・がん・まい・か・とう・かん・ちゅう
はん・でん・がい・せい・がく・しん・ふ」

Ｃ先生、お経のようだね。

と言う子もいた。一人の子が、「正信偈」を唱え始めたのには驚いた。子どもたちは、この音読を喜んでいる。しばらく続けているうちに、ある程度覚えてしまう。

Ｔ今、読んだところを漢字で書くことができるかな。

と働きかけると、一所懸命書こうとする姿が見られた。

「こんな学習で、本当に漢字が身につくのか。」

「漢字の使い方が分かるのか。」

という疑問が出てくるかもしれないが、これを続けると、漢字を覚えようとするきっかけにはなる。

その２・カタカナの町をつくろう

まず、カタカナそのものに興味をもつ学習から行った。

伊加及川久利

Ｔこの中で、読むことができる漢字はありますか。

Ｃ二番目は、「か」と読みます。

Ｔそうですね、加藤さんという名字の方がいらっしゃいますね。

Ｃ一番最後の漢字は「り」と読みます。

Ｔそうですね。じつは、昔の人はすべて漢字を使って書いていたのですが、それでは大変だということで、カタカナを作りました。漢字の一部分をとってカタカナを作り出したのです。これらの漢字にカタカナがかくれているのだけど、分かりますか。

Ｃ加という字は、カと口がある。

Ｃ久は、クです。

Ｃノもあるよ。

というように、漢字の一部からカタカナを見つけるクイズを行った。

（いかのつくり、と読む。）

「散」では、ケ・ノ・メなどを見つけたが、本来の読み方である「サ」を見つけるまでに時間がかかった。

次に、「カタカナのまちをつくろう」と働きかけた。

・カタカナすいぞくかん
・カタカナどうぶつ園

（動物の鳴き声も書くとよいと助言した。）

・カタカナレストラン
・外国の人大しゅうごう

といった題材で、カタカナ集めを行った。（絵を描くことに関心が向いてしまう子も予想されたので、絵は三つまでと限定した。）

一つでも多く見つけたいということで真剣に考えて書いていた。

Ｃ先生、まだ見つかりそうなので、次の時間も続きがやりたい。

と言う子もあった。

ことばの知識を増やす、語彙を豊かにするなど、継続的に学習を進める必要がある。低学年の段階では、楽しみながら自然にことばの力がつく、ことばについての関心が高まるような学習がよいだろう。

三学期には、百人一首に取り組む計画をしている。学年四学級で百人一首大会をすることも楽しみにしている。

（野洲市立北野小学校）

編集後記

▼１２月例会（五〇一回）は「第５回近江の子ども俳句教室」の入賞作品審査会と月例研究会を併せて行いました。研究主題「小学校国語科における学習者の「問い」を生かす授業づくり」でした。▼内容を提案協議した。提案は、「学習者による「問い」を追究できる場面は少ないということ。そのために、学習者が実現する授業を施案し、実践を分析・検証した」という内容です。その内容には、①学習者の「問い」の生み出し段階の改善②学習者の「問い」の扱い方の改善の二つをあげています。②の内容は、Ⅰ．学習者の「問い」を一覧にして開示しておく。Ⅱ．「問い」の一覧から、「学習（読み）」を学習者にゆだねる。Ⅲ．「問い」「読みなが」らに選択させる。Ⅳ．「問い」を解くことへの意識の転換を図る。「問い」を解くこと自体が目的とならないようにする。「問い」の質に応じて、学習で取り上げる。「問い」を教師も精選しておく。ただし、どの「問い」にも解決できるよう内容でつしに学習のどこかで解決できるよう内容でつしに組み立てておく」というご んぎ組ねた▼研究協議では教材の授業記録をもとに各自の実践と比べて提案について意見交流をしました。▼巻頭には、月岡正明先生から玉稿を頂きました。深謝。

（吉永幸司）